



百瀬文

『クローラー』

Momose Aya

*Crawler*

2022.10.6 Thu - 10 Mon

愛知県芸術劇場 小ホール

Mini Theater, Aichi Prefectural Art Theater



STILL ALIVE  
国際芸術祭  
あいち2022

自他の身体から生まれる違和感やコミュニケーションの不均衡、そこに生じるセクシャリティやジェンダーをめぐる問い。アーティストの百瀬文は、それらを「演じること」を通じて考察する映像やパフォーマンスを制作する。武蔵野美術大学大学院修了展で発表した《聞こえない木下さんに聞きたいいくつかのこと》(2013) は、現在に至るまで見る者に強い問いを投げかけ続ける初期の代表作だ。その後も《Social Dance》(2019)、《Born to Die》(2020)、《Love Condition》(2020、遠藤麻衣との共作)、《Flos Pavonis》(2021) などの映像作品を精力的に発表。そこに通底するのは、人間や生命同士が触れ合い、欲望し合い、すれ違う時に生じる緊張と葛藤、その背後に存在する不可視の抑圧や社会規範への強い問題意識だ。また2021年には東洋医学に基づく鍼治療を取り入れたセラピー・パフォーマンス『鍼を打つ』を発表、ケアと演劇的体験が両立する作品も開拓している。

百瀬は今回、愛知県美術館に収蔵された代表作《Jokanaan》(2019) の展示上映に加え、あらたに体験型パフォーマンス作品の制作に挑む。そこで試されるのは、個々の観客の想像力と倫理だ。観客は普段とは異なる身体の状態に誘われ、社会の中で不可視とされてきた者の声と対峙する。そこで語られる欲望に、私たちはどこまで共感し、共振することができるのか。ケアする者とされる者、施術者と患者、健常者と障害者といった、近代的な価値観によって分離された関係を超越し、欲望の根源に触れることは可能なのか。身体的接触がタブーとなったコロナ禍を経て百瀬が問いかけるのは、生きることと切り離すことのできない、性と生、そのまだ語られ得ない地平なのだ。

Momose Aya creates movies and stage pieces that, through the act of performing, examine the communication imbalance, questions of gender and sexuality, and the sense of discomfort that all emerge from the gap between one's own body in relation to others. Her most famous work *An Interview with Mr. Kinoshita: Detaching the Voice* (2013), first shown at her graduation exhibition at the Musashino Art University, continues to confront viewers with difficult questions to this day. Her more recent output includes video works such as *Social Dance* (2019), *Born to Die* (2020), *Love Condition* (2020; co-created with Endo Mai), and *Flos Pavonis* (2021), which are defined by their strong awareness of the invisible oppression and social norms that influence the tensions and difficulties arising when people or other living beings come into contact, cross paths, and feel mutual desires. In 2021, Momose presented *Performing Acupuncture*, which incorporates the eponymous technique from Chinese medicine, and continues to break new ground with works that combine the theatrical experience with therapeutic processes.

In addition to presenting her masterpiece *Jokanaan* (2019), which has recently been added to the collection of the Aichi Prefectural Museum of Art, Momose Aya will also attempt a new interactive performance piece that will test the imagination and the ethical foundation of each individual spectator. The audience is invited to switch into an alternative state of awareness and be confronted with voices from those who are usually rendered invisible within everyday society. How well will the audience empathize and resonate with their demands and desires? Will it be possible to overcome the artificial divisions erected by our modern values and worldviews, such as caregiver/care-receiver, healer/patient, healthy/disabled, and to unearth the roots of desire? With physical contact having become quasi-taboo during the Corona pandemic, Momose stages an experimental performance that asks questions just beyond the horizon of the accepted, about life and sex and other things that are inherent in the process of living.



photo by Shingo Kanagawa

## 百瀬文

1988年東京都生まれ  
東京都拠点

2013年武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。パフォーマンスを記録するための方法としてビデオを扱い始め、映像によって映像の構造を再考させる自己言及的な方法論を用いながら、他者とのコミュニケーションの複層性を扱う。近年は映像に映る身体の問題を取り上げながら、セクシャリティやジェンダーへの問いを深めている。また2017年にACCの助成を受けてニューヨークで滞在制作を行ったほか、2019年にはイム・フンスンと共同制作した『交換日記』が全州国際映画祭に正式招待されるなど、国外でも活動を行う。主な作品収蔵先に、東京都現代美術館、愛知県美術館、横浜美術館などがある。

### Momose Aya

Born 1988 in Tokyo, Japan.  
Based in Tokyo, Japan.

Momose received an MFA in Oil Painting from Musashino Art University in 2013. Using video as a method to record the performance, by employing a self-referential methodology that reconsiders the structure of moving image via moving image itself, Momose's work deals with the multi-layered complexity of communication with the other. Focusing on bodies appearing in moving images, her recent practice further questions sexuality and gender. Active both in Japan and abroad in recent years, Momose has participated in an artist residency program in New York sponsored by the Asian Cultural Council (ACC) and collaborated with Im Heung-soon on *Exchange Diary*, a project selected for the Korea Cinemascope section of 20th Jeonju International Film Festival. Her works are also included in significant public collections housed at the Museum of Contemporary Art Tokyo, the Aichi Prefectural Museum of Art and the Yokohama Museum of Art.

### 主な作品発表・受賞歴

- 2021 『鍼を打つ』シアターコモンズ'21、東京
- 2021 『I.C.A.N.S.E.E.Y.O.U.』パフォーマンスフェスティバルZIPPED、東京
- 2016 『六本木クロッシング2016展：僕の身体、あなたの声』森美術館、東京
- 2015 『アーティスト・ファイル 2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち』国立新美術館、東京
- 2014 個展「サンプルボイス」横浜美術館アートギャラリー 1、神奈川

### Selected Works & Awards

- 2021 *Performing Acupuncture*, Theater Commons Tokyo'21, Tokyo, Japan
- 2021 *I.C.A.N.S.E.E.Y.O.U.*, ZIPPED Performing Arts Festival, Tokyo, Japan
- 2016 *Roppongi Crossing 2016: My Body, Your Voice*, Mori Art Museum, Tokyo, Japan
- 2015 *Artist File 2015 Next Doors: Contemporary Art in Japan and Korea*, The National Art Center, Tokyo, Japan
- 2014 *Voice Samples* (solo), Art Gallery 1, Yokohama Museum of Art, Kanagawa, Japan

## 百瀬文 インタビュー

### 『クローラー』介助と官能をめぐる体験

Momose Aya Interview

聞き手：田中みゆき（キュレーター／プロデューサー）

—まず最初に、こういう体験を作ろうと思ったきっかけから話していただけますか。

<STILL ALIVE>っていうテーマは、コロナによってみんながALIVEの当事者になりましたねってことだと思うんです。でも私はむしろ、今までALIVEしてきたけど見過ごされてきたものたちみたいなことの方が気になっていたんです。ALIVEすること自体が困難だった人たちが、どうやって自分をケアして生きてきたか。それで、今回、車椅子女性の自慰行為という題材を扱うことにしました。かつて性欲を持っている女性は魔女扱いされたりしていたし、障害者の性もずっとないものとされてきた。そういう二重のカーテンの向こうに追いやられてきたのが障害者女性の性の問題なのかと。

声の出演をしていただいたMayumiさんは脳性麻痺の方で電動車椅子が使われています。AbemaTVで障害者女性の自慰の話がされていたのに興味を持ったんです。男性の射精介助の話は聞いたことがあったんですけど、女性の話はなかった。それで、今までなかったことにされていたことを、二人っきりで、すごく親密な時間の中で聞くという特別な体験、時間をつくりたいと思いました。もしそこに、居心地の悪さが生じるのだとすれば、それは私たちがいかにそうした内容に慣れていないかを自覚する機会にもなりますし。

—Mayumiさんは障害者を対象とした性風俗店で仕事をされていたんですね。

少しだけですが、障害者専門のセックスワーカーとして働いていたことがあって、その経験を講演会などで話したりもしています。

—Mayumiさんはなぜその仕事を始められたんですか。

もともと風俗には興味があったんだけど、お客さんとして行くのではなくて、キャストとして内側からその世界を見

たいという思いが強かったようです。お互いを求め合うような、Mayumiさんの言葉を借りれば「本物のセックス」を経験したことがないから、最初は手探りというか、すごく大変だったみたいで、とにかく必死でしたとおっしゃってたんですね。あとすごく印象的だったのは「これは誰にも文句を言わせないお金だって思った」と。常に「税金泥棒」みたいなことを言われるから、自分の身体を必死になって使って「自分が稼いだお金だ、このヤロー」みたいな気持ちになったって。それを言っているMayumiさん自身は生き生きしていましたけど、聞いていて考えさせられるところがありました。

—日本には、強制不妊手術という、主に女性の身体に負荷をかける政策が国家的に行われてきた歴史があります。障害者の性についても、特に女性についてはタブー視されてきて、明るみに出る機会がほとんどなかった。ただ、Mayumiさん自身は政治的な運動や抵抗としてというよりは、個人的な興味や欲求から始まっていることを明かされているのが良いですね。だからこういう試みにも興味を持ってくれたんでしょうか。

実は最初は一度お断りされているんですよ。私の経歴がフェミニズムに関連しているのを見たからだった、というのが後にわかるんですけど。その後、ちゃんとした企画書をもう一度送って。そしたら、1カ月くらい熟考されたあとで「私の中にフェミニストに対する偏見がありました」というような返信をいただいて、そこからは逆に信頼していただけるようになりました。女性のセックスワークという仕事をどう捉えるかということに対するフェミニストの立場の違いの問題があるわけです。フェミニストの中でもセックスワークの存在を否定するのではなく、他のあらゆる仕事と同じように個人の意志の元にその職業を選択する自由があるという立場もあって、私はそっちの方に親和性を感じていますということを伝えたら「そうなんですね」というふうに言ってもらえて。今は、ヘルパーさんがいない時にMayumiさ

んに何かあったら駆けつける、緊急介護人という制度に登録もさせてもらっています。

—異性からの偏見以上に、同性からの偏見も強そうですね。

Mayumiさんと話していて興味深く思うのは、性介助を福祉の問題として扱うのか、ある種、娯楽のように扱うかということと、障害者の性の問題が引き裂かれているということです。射精介助の活動をされているところがあるんですが、そこでは手袋をして、あくまで射精の介助をする。それが冷たい感じがするという一部の当事者や支援者からの思いもあるらしいんですよね。物理的な摩擦によって射精することだけが性的な喜びじゃないから。ただその一方で福祉の問題にならないとすると、公的な補助が得られない。性風俗で娯楽だということになれば、国からの支援が受けられなくなって、利用者のお金もかかるし、自己責任の問題になる。そんな板挟みのような状況があるみたいなこともわかったり。

—経済的な自立の話と、娯楽と捉えるか福祉と捉えるかという話と、いろんなレイヤーが重なっていて複雑ですね。そもそも「娯楽」と「福祉」では、得られるお金に差があって、それはその仕事の質や内容ではなく、社会の制度によってそう決められている。どちらが良し悪しということではなく、個人に合った選択肢が必要だと思いますが、障害のある人の場合は制度の歪みに阻まれる傾向が強い。Mayumiさんは今回、自分の話をもとにするだけでなく、自分が出演することに対しては、どのようにとらえているんですか。

そうですね。「私はモデルだし、むしろ百瀬さんが悔いのないようにやってください」という感じでした。

—障害のある人が舞台上にいる場合、他の健常者の意図によって舞台上に「上げられた」人という、受け身な存在とし

て見る人はどうしてもいますね。出演している人が自らの意思で出演したということが軽んじられる傾向があるというか。

刷り込まれた道徳意識が反射的に出てくるのかなと思います。その道徳意識の中に、実は差別意識もあるというような。それはまさに、セックスワーカーに向けられる眼差しとも似ていると思います。もちろん構造的な問題があってということもありますけど、自分の意志でやっている仕事だという視点が見過ごされてしまう。そこは当事者たちの気持ちが優先されるべきだと、私は思うんですけど。

—今回の体験のベースになるナラティブはどうつくっていったんですか。

まず、Mayumiさんの過去や自慰行為に向かうプロセス、身体感覚について、できる限り言語化してもらって、それを台本にして、来場者の人に経験してもらおう作品をつくりたいということをお伝えしました。それで何度かメールのやりとりをしたうえで、カラオケボックスで取材させてもらって。取材は膨大な量になったので、その中からエピソードを編集して台本にしました。これは私のつくるフィクションでもあるので、そこには恣意的な編集も混ざりますということも事前にお伝えしました。私は完全なドキュメンタリーは不可能とっていて、私が自分のフィルターを通して表現する以上、それはフィクションになってしまうということも正直に伝えました。それでも引き受けてもらえるのであればうれしいと。Mayumiさんは「まさにそうだ」という感じで、「そのフィクションに私はモデルとしてかわりたい」と言ってくれました。

—パフォーマンスアートとして作品をつくるにあたって、どういう体験を鑑賞者と共有したいと考えていましたか。

自分が絵画出身の人間ということもあるかもしれないのですが、舞台上に見られる人がいて、それをたとえば100



人以上の人が見ているというような構造がなんか苦手だなと思ってしまって。人数の非対称性だけでなく、片方は身体をさらして、片方は柔らかな椅子に座っているというようなことも含めて。それで、この形式を無批判に受け入れてパフォーマンスアーツの作品をつくることはできないなと思いました。それで、見ること自体の安全性がなくなるようなことを考えたんです。人と二人きりで対峙するって、すごく圧のある行為だと思います。

— 今話していた非対称性の話が、作中で車椅子が使われることにもつながっているんですね。鑑賞者がMayumiさんの器に入るような形をとる。

そうですね。Mayumiさんの過去や現在進行形の身体を想像しながら、かつ、その椅子の上で自慰行為をしていた女性と自分の身体が重ね合わされるというある種センシユアルな経験にもなるし、男性が座ったらまた違う経験にもなるだろうし……と考えました。だから、世界のどこかで、こうした車のついた椅子の上でそういうことが起こっているんだという、障害者の気持ちをわかってというよりは、個別の性的な経験、個人的な経験を共有するための場をつくっているつもりです。性的な問題は、個人的であると同時に普遍的な問題でもあるので、想像しきれないこともありつつ、どこかでわかりあえるような気もする、っていう両義性が出やすいかなと思ったんです。

— 健常者で車椅子を使い慣れている人はほとんどいないので、ある種コントロールを奪われる感じにもなると思います。自由に移動できる力を奪われたなかでの体験ということの意味は大きいと思います。もう一人、車椅子を押す人が出てくるのはなぜですか。

車椅子っていろんな人が使いますよね。生まれ持った障害があって、という人もいれば、ある日突然怪我をして歩けなくなったり。また、その時そこには、絶対に他者の助け

が必要になります。Mayumiさんが発していたメッセージも、最終的には助けてくれる人がほしいということでしたし、やっぱり一人で自己責任的に一生を終えるってことじゃなくて、自分の性的な問題や個人的な話をただ隣に座って聞いてくれる人がいたり、自分の身体感覚を誰かに委ねるっていう経験としてこの作品を終わらせたいなと思いました。

— タイトルにはどのような意味が込められていますか。

水面の上を車椅子が滑っていくようなイメージで。車椅子を漕いでいるクロールの動きで、誰もいない海を泳いでいる。それから、四つん這いの意味もありますし、たとえば下着の上を指が這うというようなセンシユアルなニュアンスもあると思いました。

— 脳性麻痺の当事者で東京大学の研究者の熊谷晋一郎さんが書かれた『リハビリの夜』に「官能」というキーワードが出てきます。そこで熊谷さんが「敗北することを官能と捉えていた」というのがすごく面白くて。性行為でなくても、介助されているという状態そのものがある種の敗北で、そこにある官能を味わうというのが、ユニークな視点だなと思いました。

面白いですよね。そこは私も狙ったところがあります。単にMayumiさんの話を聞くだけではなくて、後ろに車椅子を押す人の気配や吐息を感じるということが、すごく官能的な経験でもあるのかなと。

— Mayumiさんの話のなかで、「脚がうまく開きません」というところがありますね。それゆえに自分の身体をほぐして指を受け入れていくというような。つまり単に足を広げるだけじゃなくて、自分の身体のことなんだけど、個別の部位や器官同士が受け入れ合うような反応も伴う。それは性行為に限らず存在することで、そのことも体験する人が意識して

くれたらいいですね。

Mayumiさんの話によれば、自慰行為は痛みをとる行為でもあるんです。エクスタシーに達することで、常にこわばっている身体が一気にほぐれるそうなんです。そんなふうに自慰行為をとらえることが衝撃的だったし、確かに健常者にとってもそこは切り離せるものではないのかもしれませんが。こういうことが、自分の身体を捉え直すきっかけとして伝わるといいなと思ったりはします。

— さっき話に出た敗北もそうですが、力任せにやればいいということでもない。身体は常に周囲の環境や他人、あるいは自分の身体との交渉や妥協の中にある。そういう感覚を共有することで鑑賞者がつながれる接点があるといいですね。ただそこに至るまでには、障害の問題や性の問題という壁もあって、そこからどう細い糸を辿っていくことができるかが大事だなと思います。それには、聴く回路をどう開くかということもあるけれど、テキストの力は強いから、いかに聞きながらそれだけじゃない感覚、たとえば背中を背もたれに預けている感覚や車椅子を押されている感覚を味わえるかということもある。

その壁を私は想像しきれていないところがあります。自分自身、性の話もオープンにする方ですし。

— 体験を自分のこととして捉えるか、あくまでも対象として鑑賞するのかという壁もあるかもしれません。いくら車椅子に乗っても、どうしても距離を持って「見る」というスタンスから離れられない人もいるでしょう。男性はどう感じるのかという問題もある。ただやはり、性行為や自慰行為というプリミティブな人間の欲求にある普遍性はテキストを読んでもずっと感じました。私たちは属性で人を分けすぎているところがあると思います。しかもその分けて、分けて、分けた結果、残るものがなんなのかについては話さなくていい。障害についてもそうだし、たとえばセクシユアリティ

の問題や婚姻制度についてもそう。その残ったものがMayumiさんの話にはあるのかもしれませんが。個人として誰かとつながること、それがたとえば普段は表に出さない性行為、介助のような形で身体を委ねる行為、あるいはもっと日常的な身体同士の接触からも開かれる可能性がありうるということが伝わるといいなと思います。

---

田中みゆき  
「障害は世界を捉え直す視点」をテーマに、カテゴリーにとられないプロジェクトを通して、表現の見方や捉え方を障害当事者含む鑑賞者とともに再考する。近年の主な企画に、「音で観るダンスのワークインプログレス」(KAAT 神奈川芸術劇場など、2017- 継続中)、「ルール?展」(21\_21 DESIGN SIGHT、2022)、「語りの複数性」(東京都渋谷公園通りギャラリー、2021) など。ACCのフェローションシップを得て、2022年7月からニューヨーク大学の客員研究員としてニューヨークに滞在。

構成・演出・脚本：百瀬文  
ナレーション：Mayumi  
パフォーマンス：伊藤文乃 (オレンジスタ)  
杉山絵理  
高木理恵  
林葉々子  
藤島えり子  
渡邊智美

アドバイザー：田中みゆき  
脚本協力：Mayumi  
取材協力：渋谷真子

舞台監督：川上大二郎  
照明：吉田一弥  
音響：稲荷森健  
翻訳：森本優芽、ベン・ケーガン (Art Translators Collective)  
英語ナレーション：ジョイス・ラム

記録映像：株式会社青空  
記録写真：今井隆之

キュレーター：相馬千秋 (国際芸術祭「あいち2022」)  
制作：谷口裕子 (国際芸術祭「あいち2022」)

製作：国際芸術祭「あいち2022」、百瀬文

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会  
共催：愛知県芸術劇場  
協力：津田大介、ABEMA Prime、  
ゲーテ・インスティテュート東京

国際芸術祭「あいち2022」  
パフォーマンスアート

アドバイザー：藤井明子、前田圭哉  
キュレーター：相馬千秋

プロダクションマネージャー：清水翼  
コーディネーター：村松里実、谷口裕子、芝田暹、菅井一輝

テクニカル・コーディネーター：尾崎聡

票券：小森あや (bench Co.)

翻訳：ロバート・ツェツsche  
編集：鈴木理映子  
デザイン：山口良太

PA チャンネル



詳しくはこちら

各作品の背景についてのレクチャー、  
参加アーティストによるトークなど、  
パフォーマンス・プログラムを  
多面的に体験するためのオンライン・  
コンテンツです。

Concept, Direction and Script: Momose Aya  
Narration: Mayumi  
Performers: Ito Fumino (Orangesta)  
Sugiyama Eri  
Takagi Rie  
Hayashi Nanako  
Fujishima Eriko  
Watanabe Tomomi

Adviser: Tanaka Miyuki  
Script Cooperation: Mayumi  
Coverage Cooperation: Shibuya Mako

Stage Manager: Kawakami Daijiro  
Lighting Designer: Yoshida Kazuya  
Sound Designer: Inarimori Takeshi  
Translation: Morimoto Yume, Ben Cagan (Art Translators Collective)  
English Narration: Joyce Lam

Video Documentation: AOZORA, LTD.  
Photography: Imai Takayuki

Curator: Soma Chiaki (Aichi Triennale 2022)  
Production Coordinator: Taniguchi Yuko (Aichi Triennale 2022)

Production: Aichi Triennale 2022, Momose Aya

Presented by Aichi Triennale Organizing Committee  
Co-presented by Aichi Prefectural Art Theater  
Cooperation: Tsuda Daisuke, ABEMA Prime,  
Goethe-Institut Tokyo

AICHI TRIENNALE 2022  
Performing Arts

Adviser: Fujii Akiko, Maeda Keizo  
Curator: Soma Chiaki

Production Manager: Shimizu Tsubasa  
Coordinator: Muramatsu Satomi, Taniguchi Yuko  
Shibata Haruka, Sugai Kazuki  
Technical Coordinator: Ozaki So

Ticket Administration: Comori Aya (bench Co.)

Translation: Robert Zetzsche  
Editor: Suzuki Rieko  
Designer: Yamaguchi Ryota

2022年7月30日|土|— 10月10日|月・祝|[73日間]

芸術監督：片岡 真実 (森美術館館長、国際美術館会議 (CIMAM) 会長)

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会  
助成：一般財団法人地域創造  
愛知県政150周年記念事業



AICHI TRIENNALE 2022: STILL ALIVE

July 30 (Saturday) to October 10 (Monday, public holiday), 2022  
Artistic Director: Kataoka Mami (Director, Mori Art Museum/President, CIMAM)  
Organized by Aichi Triennale Organizing Committee  
Supported by Japan Foundation for Regional Art-Activities